

2018年夏ドイツへの旅

2018.07 関東支部 K.M.

私達夫婦とドイツとサーバスには妙な縁があってこの度、初めてのサーバストラベル先としてドイツを回るようになった。

2010年の夏、私達はドイツのグループツアーに参加していた。その途中、ポツダム宮殿で自転車旅行中のT.さん（元関東支部長）に初めてお会いしてサーバスを知るようになった。

【真ん中がT.さん、右はお友達、左は妻です】



そしてその2年後、我が家にサーバスホストとしてR.を迎える。奇しくも彼のホームタウンはポツダム！ しかも彼は単なるトラベラーではなく東京工業大学の研究員としてすずかけ台キャンパスまで一か月間、我が家から自転車で通い続けた。彼が帰国してから知ったことだが彼の指導教授が後にノーベル医学賞を受賞した大隅良則氏だ。R.はその榮譽ある共同研究者という訳。思わず私達も誇らしい気持ちになった。

その後もR.の研究は続き、二年に一回位のペースで我が家にステイ。そんな交流を続けているうちに今度は私達が彼の家にごやっかいになることになった。

7月24日。テーゲル空港まで R.が娘の K.を連れて迎えに来てくれた。そこからバスと電車を乗り継いで彼の自宅へ向かい彼の妻、Y.と再会した。彼女とは6年前、R.が離日する直前に K.と共に彼に会いに来日し、その時に会って以来だ。三人で関東支部会にも顔を見せている。

R.一家には三人の子供がおり、更に敷地続きの隣家に Y.のご両親が住んでいるので実質、七人家族だ。R.夫婦は共稼ぎなので昼間はお父さん、お母さんが幼い子の面倒を見ることが多い。

【R.一家】

お父さんに抱かれているのが長男の Ro. (3歳)。K. (後ろ向き。11歳) は集合写真撮影中も妹 L. (10歳) とプールに夢中だった。





R.はDIYの天才だ。家にステイしていた時もドイツから持ち込んだ自転車を自分で修理していた。ここでは二階家の軒先から太いパイプをひき、それを竹竿二本で組んだ足場で支え、パイプの先にホースを取り付けてドラム缶に雨水を貯めている。勿論、庭木と少し離れた所で管理している菜園の水やりの為だ。写真を撮り損ねたのが残念だがまさに棟梁の仕事ぶりだ。

今年はドイツも猛暑だった、と言っても湿度が低いので日本よりは凌ぎやすい。到着した初日からビール（これもR.の手作り！）片手に庭で夕涼みを始めて、初めてお父さん、お母さんとお会した。そのうち家族だけでなくご近所のR.の友人たちも寄って来て野外パーティが自然発生。ドイツだけでなくヨーロッパの郊外住宅は敷地の境界に低い生垣があるだけで塀などは築かない。その為もあってか、お隣のグループと自然合流しやすい。日本の都会に住んでいるとこんなことも羨ましい。

R.とY.はパートナーでもあり、研究者としてのライバルでもある。丁度、二人とも論文の締め切りが近いということで夜、遅くまでパソコンに向かっている。忙しいお二人を昼間から束縛することはできないので私達だけでベルリンとポツダム市内を探索することが多かった。ベルリンでは博物館の島、ポツダムではサンスーシ宮殿が印象深い。

【新旧のサンスーシ宮殿（左が新宮殿）】



個人旅行だからいいことばかりではない。今回の最初のトラブルの原因はドイツの交通システムへの不慣れだった。ヨーロッパの鉄道駅に改札口がないことはもう周知だろう。改札口がないということはすなわち駅員がないということなので、分からないことがあればまずインフォメーションに行く。ところが海外のそれは日本のようには親切ではない。パソコンに向かって早口でまくし立てる。キャッチで

きないので聞き返すと露骨に面倒臭そうな顔をする。こちらも気分悪いからいい加減なところで分かったふりをする。

近距離切符はほとんど販売機から買わなければならない。ドイツは日本同様に現金決済率が高いのでフランスのようにクレジットカードしか使えないということはないが切符が何種類もあるので操作画面が変わるたびにウロウロするのはご想像の通りだ。

やっと切符が買えてもどのホームからどの列車に乗ったらいいのかが分からない。先ほどインフォメーションでしっかり確認しなかったことを後悔しても後の祭り。英語の通じそうな人に聞くと、面白いほど皆が違うことを言う。

後日、このことをお父さんにこぼしたら、お父さんもこの地に越して2年たってやっとベルリンとの行き来ができるようになったと言う。

R.一家が友人の結婚披露パーティに呼ばれ、サーバス仲間だということもあって私達も誘われたが二人とも T シャツ位しか持ち合わせておらず丁重にお断りした所、急遽、一晩だけヴィッテンベルグのサーバスメンバー宅にお世話になることになった。

当日は、まだ心もとないと思ったのか Y.がポツダム中央駅からの列車に乗るまで見届けてくれた。そのお蔭で隣駅まで車で迎えに来た H.と会うことが出来た。

H.は数年前まで支部長を務めていたドイツサーバスの重鎮で今でもサーバスインターナショナルを手伝っているという。

ヴィッテンベルグはマルチン・ルッターの宗教改革活動の史跡が有名で世界遺産に登録されている。H.のガイドで旧市街を歩き、教会の塔の 200 段の階段を登り、広場でソーセージとビールを堪能した後、彼の運転で郊外の自宅に向かった。

【ドイツサーバス公認 T シャツを着る H.】



H.の家までは速度制限のないアウトバーンで時速 200 キロを経験した。安定感ある中型車でもスリルいっぱいだがジャーマンドライバーのハイウェイでの運転マナーに感心する。日本で時々、見かける走行車線からの追い抜きなど一切ないし、路線変更する時のウィンカーを照らすタイミングも皆、適切だ。

ハロルドは閑静な住宅地の瀟洒な邸宅に車を横付けした。彼等ご夫婦は最近、市内からこちらに引っ越したという。実はこの家の持ち主であるロシア人のお金持ちがスペインに移住したのでこの家の管理をまかされたとの事。いい友人を持っていて羨ましい。

妻の M.も実に朗らかな人で会話の端々に軽いジョークを交える。テラスには既に綺麗にテーブルがセッティングされており、早速に夕食をご馳走になった。

その夜、ドイツでは皆既月食が観測できるとのことで盛り上がっている。生憎の曇り空でなかなか月が顔を出さないので諦めてそろそろ寝ようかというところに、M.の「あそこに月が見える！」と呼ぶ声。椅子に登ってやっと見えるかという地平線ぎりぎりの低い位置にぼんやりと漆色に染まったお盆のような物を認めた。

翌朝は H.の買い物に付き合う。帰りに湖で泳ごうと言う。スーパーマーケット二軒を回り大量の買い物を車に積むと、冗談かと思っていたのに本当に小さな湖に車を停めた。

私に海水パンツを貸すと、彼はスッポンポンで水に飛び込んだ。見事なバタフライだ。私は平泳ぎで追おうとするが彼に借りたパンツは大きすぎて足をこぐ度にズルズルと後退していく。人気のない湖だがこんな所で大の男二人がフルチンで泳いでいるのを万一、見つかったらどんな誤解をされるか分からない

い。私は早々と退散した。

【H.と M.は本当に仲睦まじいご夫婦だ】



帰宅してランチを食べー休みしたら H.が R.の自宅まで送ると言う。M.は体調が万全ではないので同行できないとのこと。不調をおして私たちが歓待したことを知って有難いという思いと申し訳なかったという思いが半々だ。別れ難い M.と私たちはハグしてから車に乗り込んだ。正に一期一会だ。

タフな H.は一刻も時間を無駄にしない。真っ直ぐ R.宅に向かうのは勿体ないのでブルーベリー狩りをして行こうと言う。どうやら前日から今日のコースを考えていたようだ。そのブルーベリー園の広大さは将に東京ドームの〇倍という比喩に相応しい。しかも様々な遊具が揃ったアスレチックが隣接していて入場は無料。子供連れで一日遊べる。

H.持参のタッパウェア二個を持って、あぜ道を歩くこと 10 分。両側には既に実を獲りつくされた苗木が延々と続く。収穫期はもう半ば、入り口付近から順に奥へと狩場が移っていくシステムだ。

狩りの間、ブルーベリーはいくらでも自由に食べられる。甘酸っぱい実は食べ飽きない。

籠 2 つにあふれる程の収穫が合わせて 15 ユーロほどだ。果物だけでなくヨーロッパの食材は安い、と言うか日本が高すぎるのか。

一週間と長居した R.家とも明日でお別れの日、再び自然発生的に庭に全員集合。お父さんにぜひ一度、日本に来てくださいと言うがお母さんが旅が苦手なので難しいと言う。田舎生まれの自分たちにはここで娘夫婦の隣に住めるようになった今が一番幸せなのだと付け加えた。

R.は秋にはまた日本に来る。今度は K.も一緒に横浜のドイツ人学校に数か月間、通学する予定だ。彼は職場の近くのアパートを借りる予定だが私たちは反対した。残念ながら日本も昔のように安全ではないと数年前、茨城県で起きた悲惨な事件を引き合いにして説得し、最後には我が家から通わずことを彼も承知した。

サーバスを通じてドイツにも家族を持つことができた。

7月31日、ベルリン駅からICEに乗ってカッセルに向かう。今日の宿泊先はカッセルから更にバスで1時間先のフリッツラーという小さな村だ。そこに2晩滞在した後はニュールンベルグに2晩、その先はミュンヘンのホテルを予約してある。

8年前のツアーは1週間あまりで一周するという慌ただしいものだったがドイツという国は北と南で大きく雰囲気異なることを知った。商業中心でありかつ第二次世界大戦の傷跡が多く残る北部に比べてメルヘンチックな田舎が印象的だった南部。今回の旅行にあたって私たちはドイツの田舎の家庭の暮らしを見たいという希望をR.に伝えていた。そこで彼が紹介したのがフリッツラーに住むW.とニュールンベルグのS.という二人の会員だ。

カッセルには夏の期間に日曜日と水曜日に行われるイベントがある。今回、それを見られるのも楽しみだ。

見知らぬ海外の田舎での1時間近いバス旅は長い。バス停を間違っ降りようものなら目も当てられない。何しろ便は一時間に一本だ。ポツダムでの失敗は許されないと緊張したが、W.から目標のバス停が発車から何番目かとかボルボ販売店の看板が見えたら降車ボタンを押せとか懇切丁寧なメールを貰っていたお蔭で、彼が奥さんと二人でドイツ国旗を掲げて待っていてくれたバス停で正しく降りることができた。

【W.とロシア美人の奥さん、N.】



アスリートのようにいつも俊敏に動きまわる W.は多趣味な男だ。広い菜園で何種類もの野菜を育てているのを見てガーデニングが趣味かと聞いたら、いやいやこれは食べるためにやっていると言われ、自分の趣味は「パラグライダー」に「オートバイ」に「スキー」だと言う。庭先には年季の入ったホンダの大排気量バイクが置いてある。

今日はバーベキューだそうで W.が炭火で魚を焼く。腹を裂いてハーブを詰めたシイラだ。日の落ちるのが遅いドイツの夏。ディナーは野外が定番のようだ。

その晩は殆ど眠れなかった。実は二三日前から歯茎の不調を感じていたがとうとうそれが痛み出したのだ。朝、鏡を覗くと右頬がむくんでいる。しかし、私は幸運だった。信じられないような偶然だが W.の本職は歯医者だ。

それで彼に窮状を訴えると、別に驚いた様子もなく午後、診療所に来るよにと伝えてくれた。流石にプロで前の日、バス停で私と会った時から頬のむくみに気が付いていたと言う。

水曜日はドイツ全国の医療機関が午前中だけの診療と決まっている。それで予約患者がはける 12 時に私を診てくれることになった。妻と、村はずれにある中世の牢獄だった塔を見学したあとカフェで時間をつぶして診療所に彼を訪ねた。

マスクと手術着姿の W.はまるで別人のようだったがきびきびした動きはここでも変わらない。助手と受付スタッフをさっさと帰らせて私の診察を始める。状況を確認して、応急処置をすと言ってメスで患部を切り、膿を出して薬を塗った。がらんとした待合室で待っていた妻に、日本に帰ったら再度、本格的な治療が必要だが当面はこれで痛みと腫れは治まるだろうと告げると、また機敏に動き出して診療所の戸締りを始める。その時も一つ一つの作業を声に出して確認する姿は頼もしい。現金なものでそ

れを見ているだけで痛みが去ったような気がした。

診療所から自宅までは歩いて10分だ。Nは昼間はパートタイマーとして働いているので留守。彼はすぐキッチンに向かってロシア風餃子を茹でだした。

三人でさっさと食べ終わるともう出かける準備を始める。カッセルで2時から始まるイベントに駆け付けるためだ。

ガイドブックに「水の芸術」と紹介されているイベントは世界遺産ヴィルヘルムスヘーエ公園内の小山山頂に立つヘラクレス像からスタートする。

まずこの像の足元から水が流れ出す。初めはちょろちょろだがどんどん水量が増していく。私たちはヘラクレス像の傍から出発して水の流れに合わせて順に坂を下っていくという次第。イベントが始まって約1時間。最後には麓の池から水圧に押された大量の水が一気に噴水になって噴き出すのがクライマックスだ。

【写真では迫力がいまいち伝わらないのがもどかしい】





翌日、北海道のスノウパウダーに興味があるという W.に日本に来る時は必ず連絡をくれと念を押して、治療のお礼を丁重に述べてから次の目的地ニュールンベルグに向かった。

カッセルからニュールンベルグに向かう ICE の車内でも面白いことがあった。私たちはレイルヨーロッパというサイトからチケットをゲットしているので自分の席を探し出すとなんとそこはコンパートメント。薄いガラス戸の向こうの六席には既に三人の先客が座っている。しかも皆、気難しそうなビジネスメンだ。私たちがそれぞれの重いスーツケースを床に置いたまま空いている席に座ろうとすると、そのうちの一人がスーツケースは棚に上げろと指示する。窮屈な室内で息のつまるような二時間になるのかとうんざりしたら、幸いなことに三人とも次の駅で降りた。次いで入って来たのが一転、爽やかな青年だ。

やがて検札が回ってきた。同室の彼氏はスマートフォンをかざす。それを車掌が持っていた端末にかざして終わり。ドイツの列車の指定席は頭上の電光板に席番号と予約済みの区間が表示されている。そして予約済みでない指定席は誰もが座っていいらしい。この青年もこの席が空いていることを掲示板で確認して入って来たに見える。

笑顔が素敵な青年と目が合った妻が学生かと尋ねる。意外なことに勤め先から帰るところで次の停車駅であるヴォルツブルクに住んでいると言う。そこは8年前のツアーでも訪れているマイン河畔に建つ古城が印象的な美しい町だ。ひとしきりその町の話題を交わしたあと、ふとどんな仕事か彼に尋ねると、何と彼も歯医者だと言う。

そこで前のステイ先で自分が助かった話をして、よっぽど歯医者に縁があると三人で大笑いした。

ニュールンベルグ駅のホームで私たちを待つ S.はサーバスロゴをプリントした T シャツを着ていたのですぐ分かった。駅周辺には車を置ける場所がないので路面電車に乗って S.は私たちを自宅に案内した。彼の住処は集合住宅だ。

実は今回の旅を終えてから長々と報告書を書く気になったのはここニュールンベルグで体験したことをサーバスの皆さんにぜひ紹介したいと思ったからだ。

S が妻、L と住む家はいわばコミュニティハウスと言われるものだ。3階建てのアパートが三棟、コの字型に建っていてそれらのアパートに囲まれて広い中庭がある。

そして一階にはそれぞれ集会所や居住者たちで運営するカフェがある。更に地下には各戸専用の倉庫スペースと広い駐車場が設けられている。駐車場に止めてある車はカーシェアリングシステム。何よりも感心したのは居住者同士が相談して利用方法を決めたというスペースでそこには買いすぎてあまった食材や着なくなった服などを置いておく。そこから居住者は好きな物を持っていけると言う。

ここに住む人にとって一番大事なことは月に1回の運営会議であってよっぽどの事情がない限り各世帯から一人は出席して様々な問題を討議し決定するということだ。

このコミュニティに住むのは約 50 世帯。出身地も様々で多様な人種、異なる宗教を信じる人たちからなる共同体だ。

【中庭の遊具も多分、住民の手作りだ】



S.に中庭を案内される間も多くの人たちと挨拶した。クロアチアから来たという家族、オランダ出身の一人暮らしの女性、そしてアフリカ某国の難民だった家族。ベンチに座ってシュミの話を聞いていると集会所から静かにコーラス同好会の讃美歌が流れてくる。足もとに黒猫が寄ってきた。今、飼い主が旅行中なので住民が交代で面倒を見ていると言う。砂場では肌の色の違う二人の女の子が駆け回っていた。

S.とL.に子供はいない。しかし、L.は私たちに「ここに20人の孫がいる」と言った。リビングの壁には「孫」の一人が書いたと思われるL.の似顔絵がピンで止めてある。

【腹の出具合を競うL.と私】

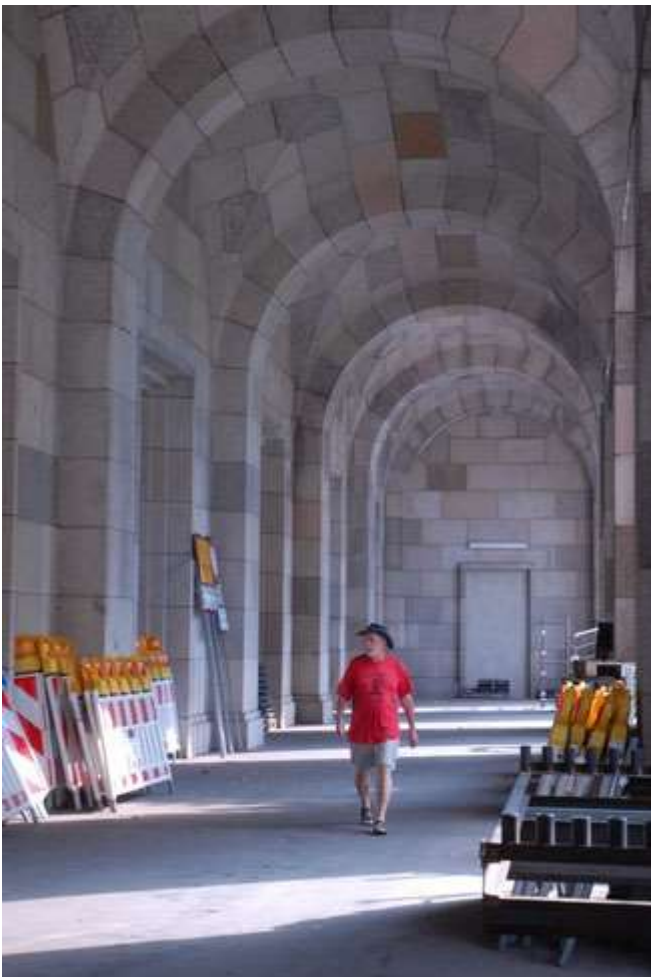


滞在二日目にニュールンベルグの旧市街、三日目にナチスの党大会跡地を S. に案内された。S. のガイドは玄人はだした。特に 75 年前、ナチス勃興のきっかけとなった地を案内する時は当時の写真や新聞記事のスクラップを手にして、いかにヒトラーが巧妙に国民を欺いたかを説く。私よりも年下の S. が自国の負の遺産を後世に伝えようとする姿勢は、彼がコミュニティという形で様々な文化圏の人々と生活を共にする姿と重なって見えた。

【ヒトラーがローマのコロッシウムに似せて作らせた党大会跡地】



【ヒトラーの入場を真似る S.】



ドイツでのサーバストラベルもニュールンベルグで終わり。この後はミュンヘンを根城にして三日間観光してからベルリンから帰国便に乗った。この帰国便で今回の旅での最後の幸運があった。ヘルシンキで成田便に乗り継ぐ予定だったが、この便が台風 13 号の影響でキャンセルになり、やむを得ず名古屋便に変更せざるを得なかった。

うんざりした気分チェックインしようとしたら係員に呼び止められ私達夫婦のチケットがビジネスクラスに変更された。人生最初のビジネスシート。台風のお蔭でゆったりと足を伸ばして日本に帰ることができた。

初めてのサーバストラベルでは R.以外にも三人もの素晴らしい会員と交流することができた。遠く離れた地に住む方々だが何故かまた会えるような気がする。それまで私たちは海外から日本を訪れる会員にできる限りの誠意をもって接することが彼等への恩返しだと思う。

カテゴリ : jp, 国際交流, 2018 年